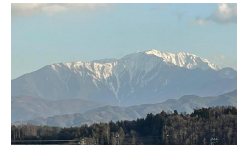


ああ 遠くの空は 晴れている



NO12-1

南箕輪村教育委員会

広報みなみみのわ 令和8年4月号に掲載されている「あたたかな まなざしで」No3を紹介します。今回の執筆は、南箕輪村教育委員会 加藤相談員です。

【発行の趣旨】

村報「みなみみのわ」に、子育てに関する情報提供コーナーを設け、子どもにとって大切な学びや経験について考えたり、日頃の子どもとの関わり方を振り返ったりする契機にしたいと思います。小中学生の子育て中の保護者に限らず、これから保育園に入学するお子さんの保護者、子育ては終わったが改めて子育てについて考えていただける世代の方々からお年寄りの方々まで、**村民全体で子育てについて考え合うコーナー**を創っていかれたらと思います。

(次回予定) 令和8年 6月号 南部小学校 柄澤校長先生が執筆します。

「地域の中で 仲間と共に 自分を磨く」ために、子育てについてみんなで考えていきましょう

あたたかな まなざしで

No.3

「俺は加藤の言うことだけでは聞いた。」

なぜなら〜

教育相談員 加藤 敬一



教員生活四十数年。私にも忘れられない一言があります。
それが、右記の一言です。なぜなら〜の後の言葉はわかりますか？
答えは、「加藤だけが俺の気持ちをわかってくれたからだ。」です。
これは、警察で指導を受けていた中学校三年生男子がそこで発した一言でした。
平成十年前後、当時は全国的に中学校が荒れている時期でした。私の勤務していた中学校も、多分にもれず、大荒れしていました。そんな中、私は三十歳代後半で生徒指導主事となり、悪戦苦闘の日々でした。先生方が殴られ、喫煙、暴力の嵐の中、無力を感じる泣きたいような日々でした。そんな中、故國分康孝先生が立ち上げた予防開発の生徒指導を目指す「教育カウンセラー協会」に出会う機会を得て、上京し、國分先生に教えを受ける中で、示唆いただいた言葉が「治そうとするな。わかろうとせよ。」でした。これはカウンセラーがクライアントに出会った時の心構えとして教えていただいたものでした。
生徒指導がうまくいかなかった時に、私は相手を治そうとしていました。不適切なその子の行動を正そうとしていました。しかし、それは私の自我であり、自分の都合であり、真に相手の立場にたった生徒指導ではなかったのです。うまくいくはずがなかったのです。
荒れてしまう時、その生徒自身も本当は、苦しいのです。「その苦しみが攻撃性に繋がっている。」彼らと会話できるようにするとそのことがわかってきました。
國分先生との出会い以降、荒れてしまう彼らの心をわかって自分なりに心がけました。気持ちを十分にわかったわけではないです。わかって努力しただけです。そのプロセスの中で表題の言葉に出会うことができました。
教員として大切なことに気づかせてくれた彼らは、私にとっては心の恩師です。生徒指導主事時代に荒れていた彼らは、今はほとんどが社会で活躍しています。そして「人を信じていいんだ。」という思いを大きな感動とともに私の心に残してくれ、その思いは今も私の胸にあります。そして、そのまま私のキャリア・アンカー（仕事上の大事な価値観）となっています。今は、スクールカウンセラーを務めさせていただく中でも大切にしている言葉「治そうとするな。わかろうとせよ。」ですが、今はわかって中身が気持ちだけでなく、その背景・環境・生い立ちなど、その子のさまざまな要因をわかってのことだと勝手に拡大解釈をしています。しかし、國分先生に怒られることはないと思います。
今は昔のように暴力的な荒れは少ないかもしれませんが。しかし、子どもたちの不登校が過去最多数となっている昨今においては、特に大人の対話・共感的な姿勢こそが子どもを救うのではないのでしょうか。

【このコーナーは、偶数月に、教育委員会スタッフと小中学校の担当者が交代で執筆していきます】